
記憶パズル

あり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶パズル

【Nコード】

N1637E

【作者名】

あり

【あらすじ】

目が覚めたと思ったら、病院で、しかも自分の名前が分からない。そんな少女を追い込むかのように、様々な出来事が、少女を襲う。

第1ピース：記憶無き少女

ふと目が覚めた…… 最初に気づいたことは、自分がベットの
上に居ることだ。

辺りを見回すと横には千羽鶴がかけられその下には聞き覚えのない
名前に対してお大事にと書かれていた。外では静かに雨が降ってい
る、辺りを見回して気づいたことはこれぐらいで、後わかった事は
自分が病院に入院していることだけだ。

後は、なぜ自分が入院しているのか、今が西暦何年の何月何日なの
かまったく分からない。

そして、普通ならわかって当然のことが分からない。私は一体誰だ
ろう……

性別は辛うじて女だと分かる、しかしそれ以外は自分がなんという
名前なのか何歳なのか、学生？社会人？自分の情報が全く浮かばな
い。

ガラガラガラ

不意にドアが開き私は驚いてドアの方に目をやった。「ナナッ！気
が付いたのね良かった」

そう言っただから入ってきた女の人が私に駆け寄ってきた。

「大丈夫？3日も寝込んでいたから心配したのよ、ナナ」

誰だろうこの人は誰だろうナナって。

「あのっ」

「何？」

考えて分からないのでは素直に聞くしかない。

「ナナって誰ですか？」 「……………何言ってるのよ三浦ナナ（みう
らなな）あなたの名前じゃない」

三浦ナナが私の名前……………なぜだろう全然聞き覚えがないけど確か
に千羽鶴にも同じ名前が書かれているところを見ると真実なのだろ
う。

「三浦ナナ……………」

「やだ、ホントに覚えて無いの？先生呼んでこなくちゃ」

診察されると私は記憶喪失というものらしい、日常生活する知識は十分にあるようなので今日中に退院して良いそうだ。

「記憶喪失か……仕方ないよねあんなことあったら、じゃ改めてあなたのこと説明してあげる、あなたの名前は三浦ナナ桜の宮高校に通う高校二年生の17才よ」桜の宮高校やはり聞き覚えなど微塵もなかった。

「ちなみに私も自己紹介しとくね、私の名前は御手洗奈乃葉みたらいなのはあなたとは同級生であり幼なじみであり親友よ」

「あのー奈乃葉さん私の家族はいないんですか？」

「……………言いつらいけど残念ながらいないわ、あなたはお姉さんと二人暮らしだったのけど二週間前あなたはあなたのお姉さんと一緒に何者かに誘拐されてしまったの。そして、3日前なぜかあなただけが返された意識のない状態でね、それから3日たって今に至るというわけよ」

「姉さん……………」

「そうよ、三浦ミミ（みうらみみ）あなたの3つ歳上でも美人だったの覚えてない？」

「ごめんなさい……………」

全然心当たりがない。

「別に謝らなくていいわよお医者さんも言ってたように無理に思い出さない方がいいわ、それより記憶の無い女の子が一人じゃ大変だろうから今日からしばらくは私の家に泊まったらいいわ父さんも母さんも賛成してくれてるし」

「そんな迷惑かける訳には……………」

「いいのよ遠慮しないで、むしろにぎやかになってありがたいわ」確かに一人で今日から生活できるかと言われるとそんな自信はまったくなかった

「じゃあ、お言葉に甘えてよろしく願いします奈乃葉さん」

「うん、よろしく後、奈乃葉でいいよ」

こうして私は無事に病院を退院することができた。

今は、一刻も早く記憶が戻らないか祈り続けるしかなかった。

第1ピース：記憶無き少女（後書き）

まあ、その……一話目終了です。何人かの方は「BOXは？」みたいな疑問を持ったかもしれません。……まあ、なんでしょうストリートに言うなら、続きが浮かばないんです（自分がB型なのも要因の一つでしょうが）もしかしたら、ネタが浮かべば、そちらも更新したいと考えています。下手くそな自分の小説を、一人でも多くの方が、楽しんでくれれば幸いです。

第2ピース：霞む人影

誰かが目の前に立っているそれが、誰かは、分からない。だけど確かに誰かがいる。

男の人が女の人か分からない、だけど確かにそこにいる、なぜ分かるんだろう、自分にもよく分からないもしかしたら自分は目すら開けてないような気がする。頑張つて、目を凝らして見てみると、ようやくうつすらと一つの人影が見えてきた、その影は霞がかかったようにぼんやりしていた。私は、その影に、手を伸ばした、その行動は、人としての探求心が、そうさせたのか他に理由があつたのか、自分にもよく分からない。ただ気付いたら、手を伸ばしていた。もう少しで、手が届きそうだった。

しかし、後少しの所で、なかなか手は届かなかった。私は試しに、目を閉じて伸ばしてみた。

一生懸命伸ばした、これでもかかってくらい伸ばした、しかし、いくら伸ばしても、私の伸ばした手は、その人影に触れる感触を感じることができなかった。

(！？)

その時、私は伸ばしてる手に何かが触れるのをやっと感じ取れた。いや、この期に及んで何かがという曖昧な表現はおかしいだろう、あの人影にやっと手を触れることができたのだ。

その人影は、とても暖かくて落ち着いた。できることならずっとずっと、もっとたくさんの面積の肌を触れてこうしていたかった。

私はこの安心感を与えてくれる人影が誰なのか確かめようと閉じていた目を開いた。

しかし、目を開けた時にはうつすらとした人影はなく代わりに目に入ったのは私と同じベッドで寝ていた奈乃葉ちゃんが、静かに寝息を立てている顔だった。

「あゝ、ねねえゝおはよー」

私の、視線を感じたのか奈乃葉ちゃんは、うつすらとした寝ぼけ眼でまだ意識がはつきりしていないのか、少々聞き取りにくい発音で私に挨拶をしてきた。

「あ、おはようございます奈乃葉……ちゃん……」「あはは、奈乃葉で良いって言ってるのに」

奈乃葉ちゃんの、名前を呼ぶ度に、いつも呼び捨てでいいと進めてくれるけれど、なかなか呼び捨てにすることはできなかった。

「まあ、好きなように呼んでくれていいんだけどね、記憶が戻ったら前みたいに呼び捨てにしてほしいな、それが私の、ミミに記憶が戻ったと実感できる最大の喜びだから」

最大の喜び……

「うん、奈乃葉ちゃん」

カーテンを開けると、外は昨日から引き続き、雨が降っていた。

「今日も雨かー、せつかくの休日なのにもつたいないなー（-_-;）」

雨……私は意識を取り戻してから晴れの景色をまだ見たことがない、つまり晴れの景色がどんな風になるのかまだ知らない。

「……晴れたらいいな」私は、静かに呟いた。

昨日、私は意識を取り戻したのも夕方ごろで、そこから色々忙しかったため、私の家から自分の服などを、集める時間がなかった。

（今着替えた服はとりあえず体格も対してかわらないので奈乃葉ちゃんが貸してくれた。）

なので今日は、奈乃葉ちゃんと二人で、私の家から着替えなどの、日用品を取りに行くことにしていた。

私は、世話になってるのに、荷物運びの手伝いをさせるのは、悪いと思ったので一人でも大丈夫だと言って断ったのだから。

「いいのいいの、どうせ暇だし、めんどい作業は一人より、二人でやったがはかどるよ」

と言ってくれたので、私はまたまたお言葉に甘えて、手伝ってもらうことにした。

奈乃葉ちゃんの家は、二階建ての一軒家だ、奈乃葉ちゃんは二階に、おじさんとおばさんは、一階にそれぞれ一部屋ずつ持っている。着替えを済ませた私たちは、二人ともまだおぼつかない足取りで、一階まで降りてきた。

一階に降りると、朝の雨の風景に、ふさわしい静寂が一階を支配していた。

昨日の夜、おじさんとおばさんは二人とも出掛けると言っていた。なので、この静寂にも私たちは戸惑うことなく、リビングに置いてあった夜ご飯の残りを朝のニュースを見ながら眠気を覚ましながらかに食べていた。

今は、朝の１１時こんな時間まで二人して寝るとは相当な疲労がたまっていたのだろう。

おじさんとおばさんが、私たちを起こさなかったのは、私たちを氣遣つてのことなのかもしれない。

ご飯を食べ終えた私たちはさっそく、出掛ける準備を始めた。

第3ピース：公園

私たちは今、私の家から荷物を運ぶ為に雨の降るなかを私の家を目指して歩き続けた。

長い時間雨が降り続けている空は、未だに厚い雨雲で覆われており、住宅街に挟まれた道路は、雨量に比例して、いたるところに水溜まりができていた。

「ねえ、奈乃葉ちゃん」

「んー、なにナナ？」

私は、今まで忙しくて聞けなかった、この質問を思いきって聞いてみた。

「記憶が無くなる前の私ってどんな感じだったの？」「……………んー」

しばらく奈乃葉ちゃんは考えて頭の中で出た結論は至って単純のようだった。

「バカだった」

「……………へ？」

多分このときの、私のような顔を、ハトが豆鉄砲を食らったような顔というのだろう。

「いや、もちろん頭の意味じゃないよ、実際頭良かったし、ただ行動に移すと後先なんてお構い無し、わたしがセンパイ達にいじめられてたときだってナナは身をていして庇ってくれたわ、下手したら自分がいじめられるかもしれないのに」記憶を無くす前の私は相当地な勇敢者だったようだ。

「後、こんなこともあったなー、確か私達が小学五年生位だったかな、この先の公園に、一匹の柴犬の子犬が、段ボールの中に捨てられてたの、その子犬はそのまま放っておいたら、後二、三日で死んじゃうのが分かる位目に見えて弱りきっていた、その時も確かこんな天気だったわ、どうにか助けてやりたかったけどうちの親は犬が

苦手でナナがお姉さんと住んでたアパートはペットを飼ってはいけない決まりだったの、その時あなたはどうしたと思う？」

私は、その時の自分がとった行動を全く予測できなかった。

「自分のアパートの大家さんに飼わせてくださいって頼みに行ったのよ、当時自分が欲しいからとちよくちよくと貯めていた自転車代の入った貯金箱を手にしてね、もちろんそんなことで規則が変わらないことは目に見えていた当然の結果だった、けど諦めずに何度も何度も頼んでたの最後には土下座までしてたわ、まあ最後には結局大家さんも折れてくれたけどね」

その話を聞いた私はその時の自分に会ってみたいと思った。

自分に会いたいと思うとは、奇妙な話だ……

「ほら、ここがその時の公園よ」

雨が降っているなかさすがに遊んでいる子どもはいないみたいだ。その公園にあるブランコにもシーソーにも回転球にも人影はまったく見られなかった。

(…………やめて)

「…………!？」

不意に頭に何かが流れ込んできた。

(おね……がい…………にはてを…………出さないで)

「誰…………あなた？」

私は、完全に正常な思考回路を失い、周りが見えなくなっていた。

(わた……しは…………ど…………う…………なっても…………には…………)

「何言ってるの？」

(わたし…………の…………を…………あげ…………る…………だから…………)

「いや、何なの？誰よあなた、私の頭で何言ってるの？やめて、やめて、やめて、やめて、やめて、やめてやめて、やめて、お願いだから、やめてよッ！」

もう自分が泣いているのか立っているのかも分からない。

(…………に…………げ…………て)

「やだ、あなたは私のなんなの、記憶のない私に何の用なの？いや、

変な物を流し込まないで」

「……どうしたの？……どうしたのナナ？」

「……！？」

はっと我に帰った私は、あわてて辺りを見回した。

周りには奈乃葉ちゃん以外の人影は何処にも見当たらない。

「どうかしたの？ひどいなら病院に行った方が……」奈乃葉ちゃんが、私の具合を心配している様子が、ひしひしと感じられた。

「……いや、大丈夫だよ、心配かけてごめんね奈乃葉ちゃん」

これは嘘ではなく、実際に今はなんてことはなく、さっきの頭に流れ込んできた言葉も、今はまったくなくなっていた。

「んーならいいけど、少しでも具合悪くなったら、いつでも遠慮なく声かけてね。」

「うん、ありがとう……」それにしてもさっきの声はなんなんだろう？

あの夢と関係あるのかな、いずれにしてもこの二つの謎が解けるのは、まだまだ先になりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1637e/>

記憶パズル

2010年10月10日05時05分発行